# 細　　田

長野県佐久市鳴瀬細田遺跡発掘調査報告書

1976

佐久市教育委員会

佐久市教育委員会

# 序　　文

## 細田遺跡に想いをめぐらせて

ひたひたと押し寄せる波、或いは避け難い時の流れの中で遠い往古の懐古のいとなみの実証が埋蔵文化財の調査でありましょう。

動機は偶然でもあり、必然でもあります。ほ場整備事業、農業の近代化は新しい時代の約束の中で、人智の然らしむるものでもあり、希求でもあり、原始の延長されたドラマでもありましょう。縄文時代に人々は厳しい自然と生を保つために、次から次への戦いに挑む手段に思いをめぐらし、智恵を磨かざるを得なかったでありましょう。石を武器とすべく、又、その硬度を利用して利器とし、更に鋭角をつけ、その効用を高めたでありましょう。細田遺跡において出土した打製石斧も人智の一片であり、そこまで高めた人類進化の実証物であり、これを手にして想いは無限に展開して止まるところを知りません。

細田遺跡は県営ほ場整備事業に端を発したものですが、昭和50年11月11日より同月30日までの怱忙に亘るアクロバット調査でした。既に冬の気配は濃厚であり、霜おける凍土の中で史的考察の意欲のみが、又、熱気が調査団の使命観と学究への凝結として黙々と進められました。

斯界の権威藤沢先生の一糸乱れざる学理の判断とご指導に団長としての重責を担っていただき佐久考古学会員諸氏の一物たりとも目こぼしをしない密度と究明の態度は、正に鉄桶の調査布陣でした。担当グリッド毎に詳細な責任が果され検出された土壙も５基、溝状遺構１基が確認され、出土遺物も縄文土器片、打製石斧、更に複合して弥生時代後期の壺、又、降りて古墳時代前期の甕等々古代人の営みの跡に不滅の繰り返された生きざまを見て考古学の偽らざる真実性にとかく文献依存の史学前の真憑性を知って感動に心満つる思いでした。考古学は好奇ではありません。遺物・遺構のもつ意味と重要性に改めてその意義の重さを再認識すべきと考えます。

団長の藤沢先生、佐久考古学会の皆様方、地元落合区の皆様、野沢南高校、浅間中学校の皆さんの学究の姿に、又、ご協力に深謝いたしまして、この度の細田遺跡調査に想いを再度めぐらせてペンをおきます。

佐久市教育長　細萱　勇美

# 例　　言

1　本書は、昭和50年11月11日～11月30日にわたり発掘調査を実施した、長野県佐久市大字鳴瀬字細田に所在する細田遺跡の調査報告書である。

2　本調査は、東信土地改良事務所の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。

3　本調査は、藤沢平治を発掘担当者とし、佐久考古学会有志を調査員として地元落合地区の方々、野沢南高校郷土史班、浅間中学校生徒の協力を得て実施した。

4　本書に挿入した遺構・遺物の実測図作成は、調査員が行ない、トレスは島田恵子・花岡弘・林幸彦・林慶子が担当した。

5　本書に掲載した写真は、林・花岡・高村が撮影したものを使用した。

6　本書の執筆は、担当調査員が行ない文末にそれぞれの文責を記した。

7　本書の編集は、高村・林が担当し、藤沢が校閲した。

8　本遺跡の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

発掘調査にあたり長野県教育委員会文化課指導主事桐原健氏には適切な御指導をいただき、地元は場整備関係者、土地耕作者及び地元の皆様には物心両面にわたる御援助を賜り厚く御礼申し上げます。また、報告書作成にあたっては、小山岳夫氏の御助言を賜わった。記して謝意を表したい。

# 凡　　例

1　土器一覧表においては、下記の分類によって表記してある。

○土器実測図の分類　　P－完全実測、R－回転実測、F－破片実測。

○土器破片の分類

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| A | 口辺部、底部破片で口径、底径が¼以上を有する破片 | 1　全部位が存在するもの（口辺部～底部まで連続する） | 1　完形 | （A11） |
| | | | 2　口径と底径が¾以上 | （A12） |
| | | | 3　1、2以外の個体 | （A13） |
| | | 2　全部位が存在しないもの | 1　口径または底径が¾以上 | （A21） |
| | | | 2　1以外の個体 | （A22） |
| B | A以外の破片 | 1　特筆すべき破片（B1） | | |
| | | 2　1以外の破片　（B2） | | |

2　土器一覧表の法量は、上から口径、高さ、底径の順に記載し、一不明、（　）現存値を表わす。

3　石器一覧表においては、欠損品の長さ、幅、厚さ、重量は（　）で示す。

# 本　文　目　次

序　文、例　言、凡　例、本文目次、挿図目次
I　発掘調査の経緯 …… 1
　1　調査に至る動機 …… 1
　2　調査の概要 …… 2
　3　調査日誌 …… 2
II　遺跡の環境 …… 4
III　遺構と遺物 …… 7
　1　土壙 …… 7
　2　溝状遺構 …… 9
　3　出土遺物 …… 9
IV　周辺遺跡の既出資料 …… 13
V　まとめ …… 17

# 挿　図　目　次

第1図　細田遺跡の位置及び発掘区設定図（1：75,000） …… 1
第2図　周辺遺跡分布図（1：25,000） …… 5
第3図　D1号土壙実測図（1：80） …… 7
第4図　D2号土壙実測図（1：80） …… 7
第5図　D3号土壙実測図（1：80） …… 7
第6図　D4・5号土壙実測図（1：80） …… 7
第7図　M1号溝状遺構実測図（1：80） …… 9
第8図　細田遺跡出土土器実測図及び拓影（1：3） …… 10
第9図　細田遺跡出土石器実測図（1：3但し石鏃は1：1） …… 12
第10図　十二山遺跡既出土器実測図〈その1〉（1：3） …… 14
第11図　十二山遺跡既出土器実測図〈その2〉（1：3） …… 15
第12図　細田遺跡遺構全体図（1：600） …… 17

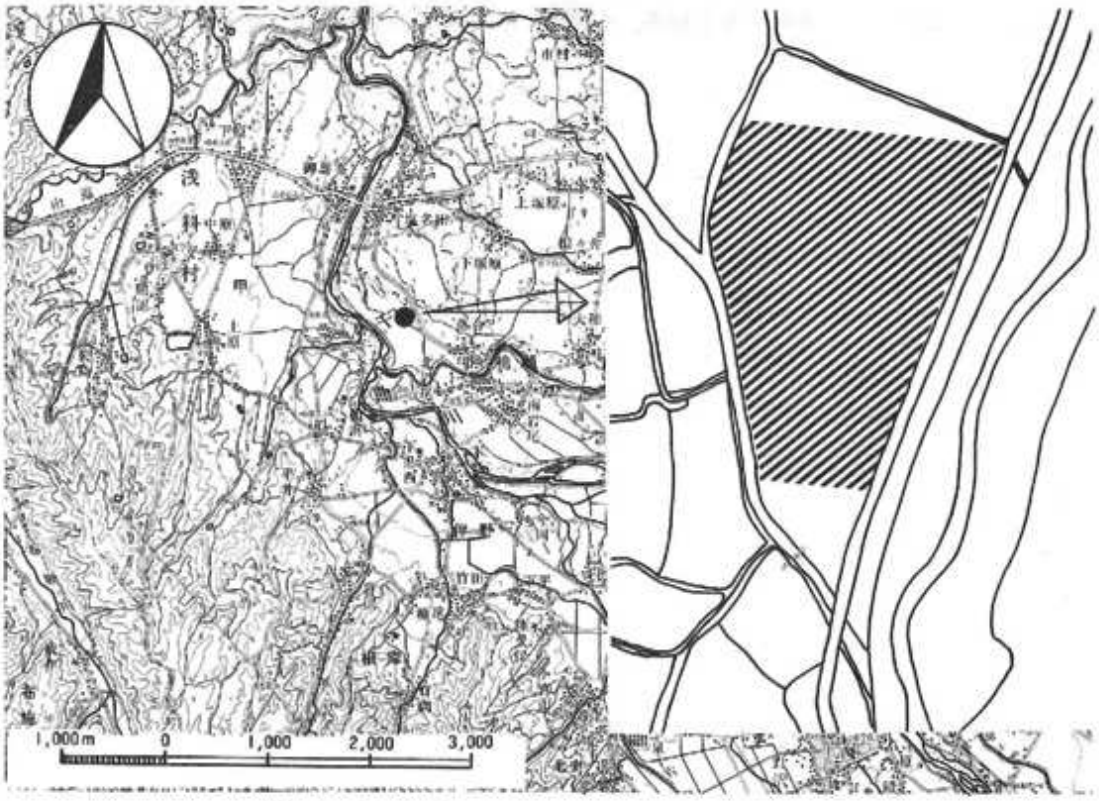
# Ⅰ　発掘調査の経緯

## 1　調査に至る動機

佐久市大字鳴瀬の細田遺跡は、落合区の西方、千曲川と湯川の合流点の東北岸段丘に所在し、付近には片山遺跡、熊の堂遺跡、狐塚古墳等の遺跡が存在する。

細田遺跡が所在する一帯は、長野県が施行する昭和50年度県営北部地区ほ場整備事業地区内で遺跡の破壊が予想されるため、昭和50年６月２日、長野県教育委員会文化課指導主事桐原健氏の来市をみ、東信土地改良事務所・土地改良区・佐久市教委の四者で現地調査を実施した。その結果、遺跡の現状保存は避け難く、工事実施前に記録保存することになり、佐久市教委は、東信土地改良事務所より調査を依頼され、10月10日までに発掘調査を終了させることを条件に、７月１日、委託契約を締結した。

しかし、土地所有者による、野菜・花等、耕作物の収穫の都合により、調査は大幅な延期を余儀なくされた。11月初旬に耕作物の収穫がほぼ完了した時点で、佐久市教委は、調査担当者に野沢北高校教諭藤沢平治氏をもって、11月11日より調査実施に踏み切った。　（事務局）




第１図　細田遺跡の位置及び発掘区設定図（１：75,000）

## 2　調査の概要

**遺跡名**　細田遺跡　**所在地**　佐久市大字鳴瀬字細田　**発掘期間**　昭和50年11月11日～11月30日

**調査に関する事務局**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 〈第1次〉 | 細萱勇美 | 〈第2次〉大井昭二 | 佐久市教育委員会教育長 | |
| | 小林栄一郎 | 森泉郁太郎 | 同 | 教育次長 |
| | 高畑五男 | 並木　進 | 同 | 社会教育課長 |
| | 桜井長夫 | 相沢幸男 | 同 | 社会教育係長 |
| | 高村博文 | 林幸彦・関本功・細萱健一 | 同 | 社会教育係 |

**調査団の構成**

〈第1次〉（団長）藤沢平治。（調査員）武藤金、与良清、井出正義、白倉盛男、森泉定勝、黒岩忠男、三石延雄、井上行雄、木内捷、佐藤敏、土屋長久、臼田武正、花岡弘、島田恵子、新津開三、以上佐久考古学会員。（協力者）岩間マサイ、木曽すず子、中山茂子、中山たつの、羽毛田たけ子、依田よし江、以上地元協力者。青木すみ江、石田多美子、清水まゆみ、高畑千浪、以上野沢南高生。堤隆、秋山孝明、井上和幸、小栗靖、小平琢実、小林義信、佐藤修、依田豊弘、以上浅間中学生。

〈第2次〉（団長）藤沢平治。（調査員）武藤金、三石延雄、白倉盛男、高村博文、林幸彦、花岡弘、島田恵子。（調査補助員）林慶子、堤隆。

## 3　調査日誌

**11月11日（火）　晴れ**

午後2時より重機による調査対象地区の表土削平作業を開始する。しかし、まだ対象区内に、ネギ・大根・長いも等の作物が残っているため、その間、3ヶ所を削平する。この3ヶ所をこれから順次第1地区・第2地区・第3地区とする。

**11月12日（水）　晴れ**

午後に器材の運搬、テントの設営を行ない第1地区にグリッドを設定する。

**11月13日（木）　晴れ**

第2・3地区のグリッド設定作業を行ない全地区のグリッド設定作業を完了する。第1地区の基準杭に沿って、C・D－9グリッド内に幅1mのトレンチを入れ、土層確認及び遺構検出作業を行なう。

**11月14日（金）　小雨のち雨**

小雨の降り続く中、昨日と同じく土層確認及び遺構検出作業を続ける。C－3～12グリッド内に幅1mのトレンチを入れる。

**11月15日（土）　雨のため中止**

**11月16日（日）　晴れ時々小雨**

第1地区のA・B・C・D—3グリッド内に幅1mのトレンチをいれ、遺構検出作業を行なう。

第2地区、L—8・9、M—6～12グリッド内の掘り下げを行ない、M—8グリッド内より多数の弥生後期土器片が出土する。

**11月17日（日）　晴れ**

第2地区において遺構検出作業を続行する。

**11月18日（火）　晴れ**

昨日と同様遺構確認作業を続けた結果、L—11グリッド内より土壙を確認した。これをD1号土壙とする。又、N—10・11グリッド内にも黒色の落ち込みを確認する。D1号土壙の西側半分を掘り下げる。

**11月19日（水）　雨のため中止**

**11月20日（木）　晴れ**

第2地区のL・M・N—6・7・8・9・10・11グリッド内に土壙が確認され、これをD2号土壙とする。

**11月21日（金）　晴れ**

第2地区のL・M・N—6・7・8グリッド内を再度精査する。第3地区においても、基準杭に沿ってトレンチを入れる。R—9・10、S—7・8・9・10、T—9・10の各グリッド内の掘り下げを行なう。

**11月22日（土）　晴れ**

第2地区のN—10・11グリッド内で確認された黒色の落ち込みを追求する。第3地区では、昨日同様、遺構検出作業を続行する。

**11月23日（日）　曇り**

第3地区の拡張したグリッド内を精査し、本日で第3地区の作業を終了する。第1・2地区間の遺構検出のために数ヶ所を1m四方掘り下げる。第1地区の土層断面を清掃し、東西土層断面を実測する。第2地区のO・P—9～11を拡張し、D3号土壙を確認する。

**11月24日（月）　晴れ**

D1・2・3号土壙の実測、写真撮影を完了する。第4地区のF・G—17グリッド内を掘り下げ、遺構検出作業を行なう。

**11月25日（火）　晴れ**

第4地区の拡張作業を行ない、新たにF・G—8グリッドを掘り下げる。F・G—17・18グリッド内の遺構検出作業を続ける。

第2地区のO—9～11グリッドを拡張し、N—10グリッドの東端に確認されていた落ち込みを追求し、2基の土壙と思われるプランを確認する。

**11月26日（水）　晴れ　　休日**

**11月27日（木）　　曇りのち雨**

雨中、第2地区の土壙を全部完全に掘り下げる。第4地区は遺構プランの確認作業を続ける。

**11月28日（金）　晴れ**

第4地区の遺構プラン追求のため周辺を拡張精査する。

**11月29日（土）　晴れ**

第2地区は、土壙の実測を行なう。第4地区に検出された遺構を、M1号溝状遺構とする。

**11月30日（日）　晴れ**

D4・5号土壙とM1号溝状遺構の実測、写真撮影を終了する。本日で現場の全作業を完了する。　　（高村博文）

## II　遺跡の環境

細田遺跡は、佐久市高瀬地区の最西端、千曲川に沿った河岸段丘上、水田一部畑地帯中に立地している。

佐久市内を杉の木付近から西流して来た千曲川が相浜断崖に突き当り、方向を変えて北流し、鳴瀬で湯川と合流した、北へ約1㎞の千曲川右岸に遺跡は存在する。

この遺跡地の東部には、佐久市塚原・平塚を中心とした、標高680m内外のほぼ平担な段丘面(第二段丘面）があり、この段丘西端を千曲川の浸蝕による高さ約10mの崖を下って千曲川現流路に至るまで、ほぼ平担面を形成している(第一段丘)。この第一段丘は、最初第二段丘が千曲川の浸蝕によって切り開かれた旧河床面に再堆積された堆積面で、千曲川は更に西に再浸蝕して現河流路となって残されたものである。多少西に極めてゆるい傾斜をしており、高い部分が僅かに一部畑地となっているが、大部分は水田として耕作されており、今回の細田遺跡はその僅かな畑地の部分に当っている。

第二段丘面を形成している地質は、北は常田、東は現在の小海線線路付近まで、南は湯川の線に囲まれた地域に分布する浅間山第一次黒斑火山の大噴出に起因する"塚原泥流"によって構成されている。この塚原泥流は火山灰・火山礫・火山岩塊・巨大な岩塊の堆積物が大部分で、黒斑火山の規模と活動の壮大さを物語っている。巨大な岩塊を中心として、この段丘面には火山裾野の特殊な地形といわれる"流れ山"が数十ヶ所各地に散在し、田園風景の中に塚状に残っており、その一部は古墳にも利用され、平塚・塚原等の地名の起源にも関係している。

第一段丘は旧千曲川河床の堆積物で、今回発掘の細田遺跡に際して、表土下から掘出された大小の礫は完全に水流によって円磨された河床礫ばかりであった。この河床礫の岩質は長石の斑晶の多い黒色多孔質の安山岩で、確実に浅間火山系と推定できるものばかりであった。従って本遺跡付近は湯川が千曲川と合流した直後の地点で、湯川の影響下による堆積物であると言い得る。

千曲川西岸には、第三紀鮮新世最上部の相浜層の崖が高さ10m内外の段丘を作って、塩名田付近から南部相浜まで連続して露出しているが、細田遺跡とは直接関連がないので、今回ははぶくこととする。

細田遺跡付近には、第一段丘面に存在する縄文時代から歴史時代までの遺物の散布をみる大ふけ遺跡（2)、歴史時代の切廻遺跡（3)、古墳・歴史時代の畳畑遺跡（4）があり、第二段丘面には、縄文時代から歴史時代までの熊の堂遺跡（5)、古墳・歴史時代の十二山遺跡（30)、弥生時代から歴史時代までの神明遺跡（6）が存在する。このうちの十二山遺跡からは、耕作の際、多量の土師器を発見しており、本報告書の第IV章に詳述してある。　　（白倉盛男）

第2図　周辺遺跡分布図（1：25,000）

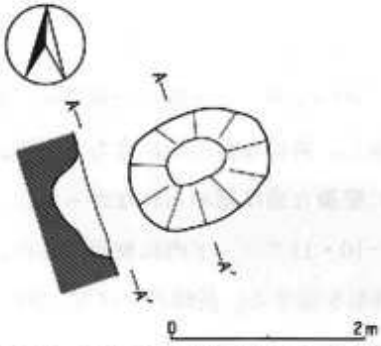
第1表　周辺遺跡一覧表

| No | 遺跡名 | 所在地 | 立地 | 縄 | 弥 | 古 | 歴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 細田遺跡 | 大字鳴瀬細田 | 段丘 | ○ | ○ | ○ | ○ | S50年11月11日～11月30日発掘調査 |
| 2 | 大ふけ遺跡 | 大字鳴瀬大ふけ | 〃 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 3 | 切畑遺跡 | 大字鳴瀬切畑 | 〃 | | | | ○ | |
| 4 | 畳畑遺跡 | 大字鳴瀬畳畑和具 | 〃 | | | ○ | ○ | |
| 5 | 熊の堂遺跡 | 大字鳴瀬熊の堂 | 台地 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 6 | 神明遺跡 | 大字鳴瀬神明 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | |
| 7 | 居屋敷遺跡 | 大字鳴瀬居屋敷 | 段丘 | | | ○ | | |
| 8 | 北道見遺跡 | 大字鳴瀬北道見 | 台地 | | ○ | ○ | ○ | |
| 9 | 道見塚古墳 | 大字鳴瀬道見塚 | 〃 | | | ○ | | |
| 10 | 岩尾城跡 | 大字鳴瀬城跡 | 〃 | | | | ○ | |
| 11 | 鳴瀬宮前遺跡 | 大字鳴瀬宮の前 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | |
| 12 | 上の平遺跡 | 大字鳴瀬上の平 | 〃 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 13 | 白山遺跡 | 大字鳴瀬白山 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | |
| 14 | 今井宮の前遺跡 | 大字今井宮の前 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | |
| 15 | 今井城跡 | 大字今井下原 | 〃 | | | | ○ | |
| 16 | 今井西原遺跡 | 〃 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | S49年6月～7月発掘調査 |
| 17 | 寄塚古墳 | 大字横和寄塚592 | 段丘 | | | ○ | | |
| 18 | 寄塚遺跡 | 大字横和寄塚 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | |
| 19 | 藤塚古墳 | 大字塚原藤塚 | 〃 | | | ○ | | |
| 20 | 宮の前田遺跡 | 大字塚原宮の前田 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | |
| 21 | 新城遺跡 | 大字塚原新城 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | |
| 22 | 羽黒遺跡 | 大字塚原羽黒 | 〃 | ○ | | | ○ | |
| 23 | 狐塚古墳 | 大字塚原狐塚 | 〃 | | | ○ | | |
| 24 | 中島遺跡 | 大字根岸中島 | 〃 | ○ | | | ○ | |
| 25 | 小金平遺跡 | 大字根岸小金平 | 〃 | ○ | | | ○ | |
| 26 | 腰巻遺跡 | 大字根岸相浜田 | 〃 | | ○ | | ○ | |
| 27 | 下原遺跡 | 大字伊野宮地西屋敷 | 〃 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 28 | 休石遺跡 | 大字伊野休石 | 〃 | | | | ○ | S53年3月18日～21日試掘調査 |
| 29 | 唐松坂遺跡 | 大字伊野唐松坂 | 〃 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 30 | 十二山遺跡 | 大字鳴瀬十二山 | 〃 | | | ○ | ○ | |
| 31 | 舞台場遺跡 | 大字伊野舞台場 | 〃 | | ○ | ○ | ○ | |

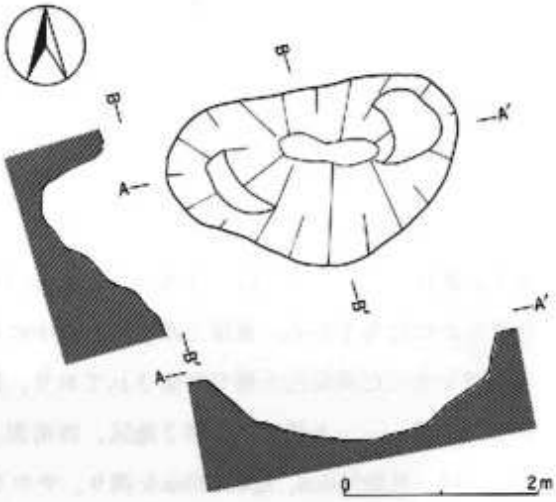
# Ⅲ　遺構と遺物

## 1　土壙

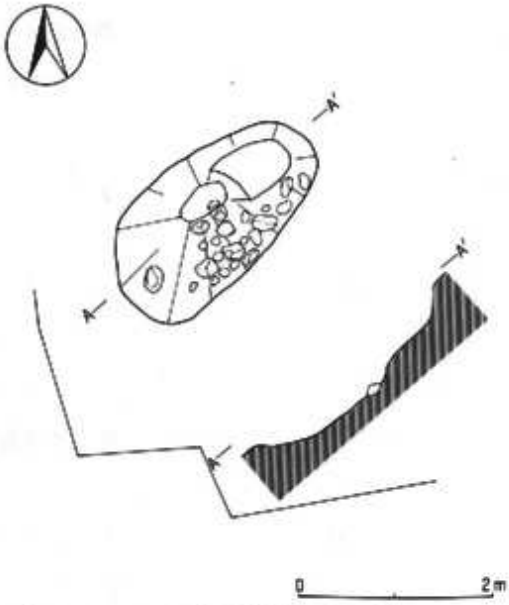
**D１号土壙**……本遺構は、第２地区西寄りのＬ－11グリッド内に検出された。平面プランは、東西156cm、南北120cmを測り、東西にやや長い不整の円形を呈す。長軸方位は、Ｎ－66°－Ｅを示す。壁高は確認面より20～29cmを測り、北壁がやや深く急傾斜で立ち上がり、南壁はわずか



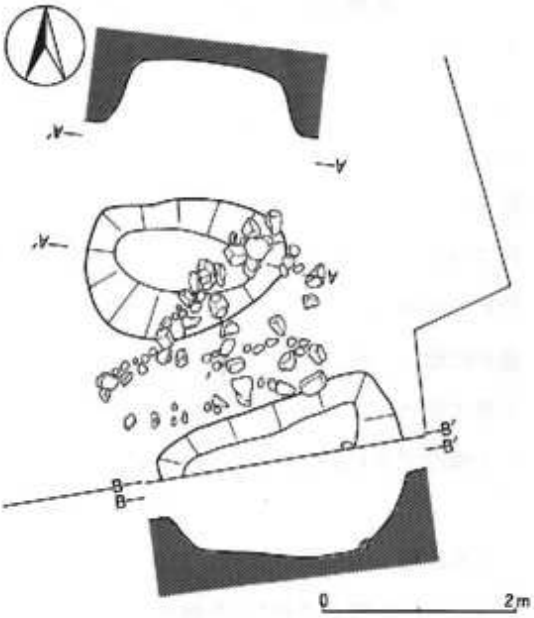

第３図　Ｄ１号土壙実測図（1：80）




第４図　Ｄ２号土壙実測図（1：80）




第５図　Ｄ３号土壙実測図（1：80）




第６図　D4・5土壙実測図（1：80）

第2表　細田遺跡土壙一覧表

| 土壙 No. | 位置（グリッド） | 平面プラン 長軸 | 短軸 | 長軸方位 | 形態 | 検出面からの深さ | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| D1 | L－11 | 156cm | 120cm | N－66°－E | 不整の円形 | 39cm | 出土遺物なし |
| D2 | L・M－9・10 | 304cm | 184cm | N－77°－E | 半円形 | 80cm | 〃 |
| D3 | N－10・11, O－11 | 250cm | 130cm | N－50°－E | 小判形 | 44cm | 〃 |
| D4 | N・O－9・10 | 208cm | 140cm | N－82°－W | 楕円形 | 65cm | 〃 |
| D5 | O－9・10 | 250cm | ? | N－71°－E | 長方形(推定) | 70cm | 〃 |

に段を有して、なだらかに立ち上がる。覆土は小礫を含んだ黒褐色土層で形成されており、底面において特に変わった面は認められなかった。

**D2号土壙**……本遺構は、D1号土壙の東側約90cmに近接し、L・M－9・10グリッド内に検出された。平面プランは、長軸304cm、短軸184cmを測り、南側に張り出しを持つ不整の半円形を呈す。長軸方位は、N－77°－Eを示す。壁高は確認面より80cmを測り、北壁は急傾斜に、南壁はなだらかに立ち上がる。東壁と西壁は、途中にテラスを有し、共になだらかに立ち上がる。覆土は小礫を含んだ黄褐色土層で形成されており、底面に特に堅緻な面は認められなかった。

**D3号土壙**……本遺構は、第2地区、西南側、O・N－10・11グリッド内に検出された。平面プランは、長軸250cm、短軸120cmを測り、やや不整の小判形を呈する。長軸方位はN－50°－Eを示す。深さは、確認面より44cmを測り、東側に広いテラスを有し、西壁はなだらかに立ち上がる。

覆土は黒褐色を呈し、底面南壁よりに10×14cmの礫が検出された。

プラン南東側上部付近から、2～25cm大の礫25ケが検出され、この礫はD4・5号土壙確認の際、上面より検出されたものと同質であり、また、遺構外には認められなかった。付近の遺構検出作業においても、礫がまとまって存在したのは、D4・5号土壙の上面だけであり、これらの礫群は人為的なものと思われる。

**D4号土壙**……本遺構は、D3号土壙の東側約150cmに隣接し、O・N－9・10グリッド内に検出された。平面プランは、長軸208cm、短軸140cmを測り、西南部にやや張り出しを持つ不整の楕円形を呈する。壁高は、確認面より65cmを測り、壁は総じて急傾斜に立ち上がる。底面は中央が僅かに低く、特に堅緻な面は認められなかった。本遺構とD5号土壙との間の上面には、D3号土壙で述べたように、東に広がりをもつ2～30cm大の礫群が存在する。その範囲が本遺構とD5号土壙のプランにまたがっていることから関連のないものと考えられるが、速急な判断はできない。

**D5号土壙**……本遺構は、D4号土壙の南側約90cmに近接し、O－9・10グリッド内に全プランの約半分が確認された。平面プランは、東西に250cmを測り、長軸と思われる方位は、N－71°－Eを示し、北東及び北西隅が角張っていることから長方形を呈するかもしれない。底面は東側が深

く、東壁はなだらかに、西壁はやや角度を持って立ち上がる。

以上5基の土壙からの出土遺物はまったくなく、その所産期及び、性格等については言及できない。　（三石延雄）

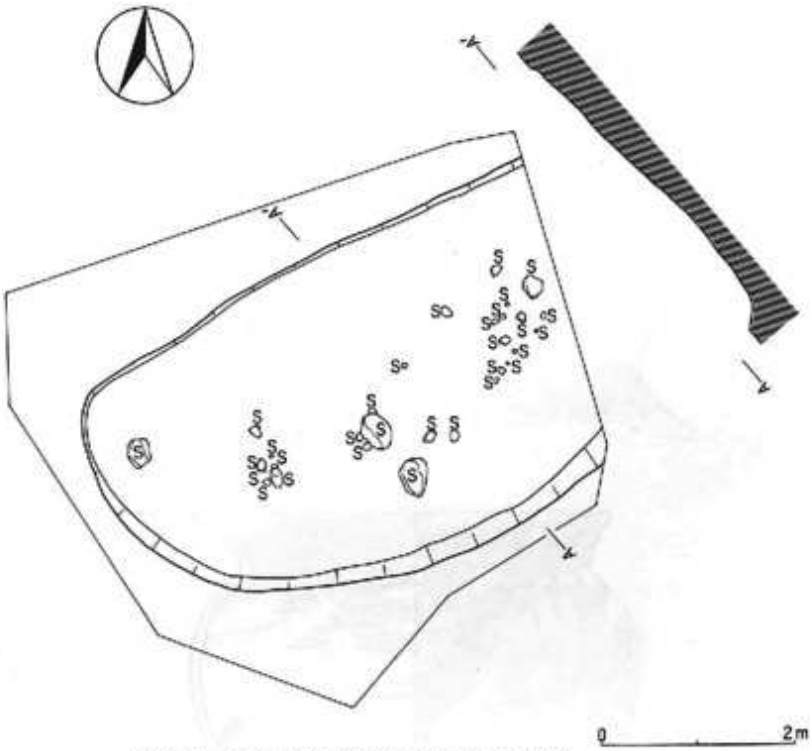
## 2　溝状遺構

本遺構は、第4地区西側のF・G—17・18グリッド内に検出された西方で閉じるM1号溝状遺構である。

南方の壁は、外側へ弧を描いて東に伸び、北方の壁は、ほぼ直線的に東に伸びている。

平面プランは、検出された溝の中央付近で最大幅340cmを計測し、検出長520cmを測る。

深さは、最深部がやや南側に偏っており、確認面より26cmを測り、南壁が急角度で立ち上がるのに対して、北壁は、非常になだらかな立ち上がりを見せている。覆土は黒褐色を呈し、砂層の堆積は見られなかった。また、溝の中心軸付近の底面には、拳～頭大の礫が分散しており、特に西南付近の8ケの礫は焼石だった。



第7図　M1号溝状遺構実測図（1：80）

遺物は、東側壁寄りに土師器の小形甕形土器（第8図2）に紅ガラが入って出土し、さらに西側壁近くより、弥生後期土器片、器台、土師器が出土している。しかし破片のほとんどは2～5cm大の細片であった。

本遺構は完掘にいたらず、したがってその性格を明らかにする事は難かしいが、検出されたプラン及び出土遺物から想像するに古墳時代前期の周溝墓の1部かもしれない。　（三石延雄）

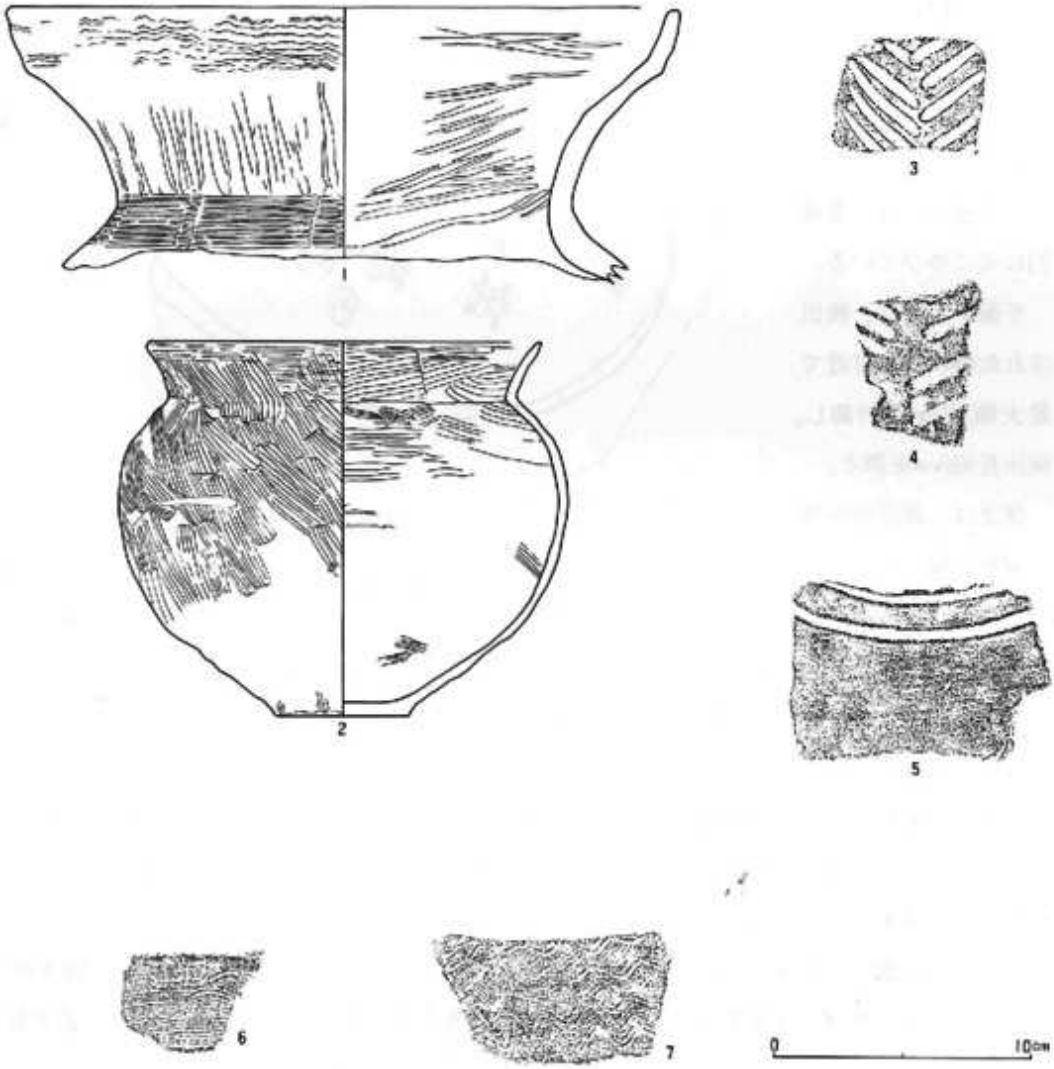
## 3　出土遺物

細田遺跡からは、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺物が出土している。このうち、図示し得

たものには、縄文土器・弥生土器・土師器、打製石斧・凹石・砥石・石鏃がある。以下、図示した遺物について述べたい。なお、土器・石器の観察表は、第３・４表に示した。

第８図１は、箱清水式土器の壺の破片で、受け口状の口辺部を有する。口辺部に櫛描波状文、頸部に２連止めの簾状文が施文されている。内面は、横方向のヘラミガキがなされる。法量は、口径25.5cm、残存高10.6cmを測る。頸部の施文具の単位は９本であるが、口辺部については不明である。

第８図２は、溝状遺構底面から出土した土師器甕で、約½残存している。口径15cm、高さ14.5




第８図　細田遺跡出土土器実測図及び拓影（１：３）

第3表　細田遺跡出土土器一覧表

| 挿図番号 | 器種 | 実測分類 | 破片分類部位 | 法量 | 器形の特徴 | 調整（外面） | 調整（内面） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8−1 | 壺 | P | A21 | 25.5<br>(10.6)<br>− | 受け口状の口辺部を有する。 | 口辺部　櫛描波状文。<br>頸部　2連止めの簾状文。（単位9本） | ヘラミガキ。 | 褐色。約½存。<br>8−MG出土。 |
| 8−2 | 甕 | P | A13 | 15.0<br>14.5<br>5.2 | 口辺部は「くの字」状に外反する。最大径を胴中央部に有する。 | 口辺部　ハケメ後ヨコナデ。<br>頸部〜底部　ハケメ。（胴下半部ではハケメは認めらず。） | 口辺部〜底部　ハケメ。 | 茶褐色。約½存。<br>M1号溝状遺構出土。 |
| 8−3 | 深鉢 | − | − | −<br>(4.8)<br>− | | 綾杉文。 | ナデ。 | 明茶褐色。<br>8−NG出土。 |
| 8−4 | 深鉢 | − | − | −<br>(6.8)<br>− | | 綾杉文。 | ナデ。 | 黒褐色。<br>7−MG出土。 |
| 8−5 | 壺 | − | − | −<br>(7.0)<br>− | | 沈線文。 | ヘラミガキ。 | 外面暗茶褐色。<br>内面黒褐色。<br>4−DG出土。 |
| 8−6 | 甕 | − | − | −<br>(4.1)<br>− | 口辺部は内弯無殊に外反する。 | 口辺部　ハケメ後ヨコナデ。<br>頸部　2連止めの簾状文。 | ヘラミガキ。 | 暗茶褐色。<br>9−LG出土。 |
| 8−7 | 甕 | − | − | −<br>(4.8)<br>− | | 櫛描波状文。 | ヘラミガキ。 | 外面赤褐色。<br>内面褐色。<br>4−DG出土。 |

cm、底径5.2cmを測る。内・外面ともハケメ整形がなされる。古墳時代前期後半に位置するものと思われる。

第8図3・4は、縄文時代中期の深鉢の胴部破片である。いずれも、綾杉文が施文されている。曽利Ⅲ〜Ⅳ式に比定されるものと考えられる。

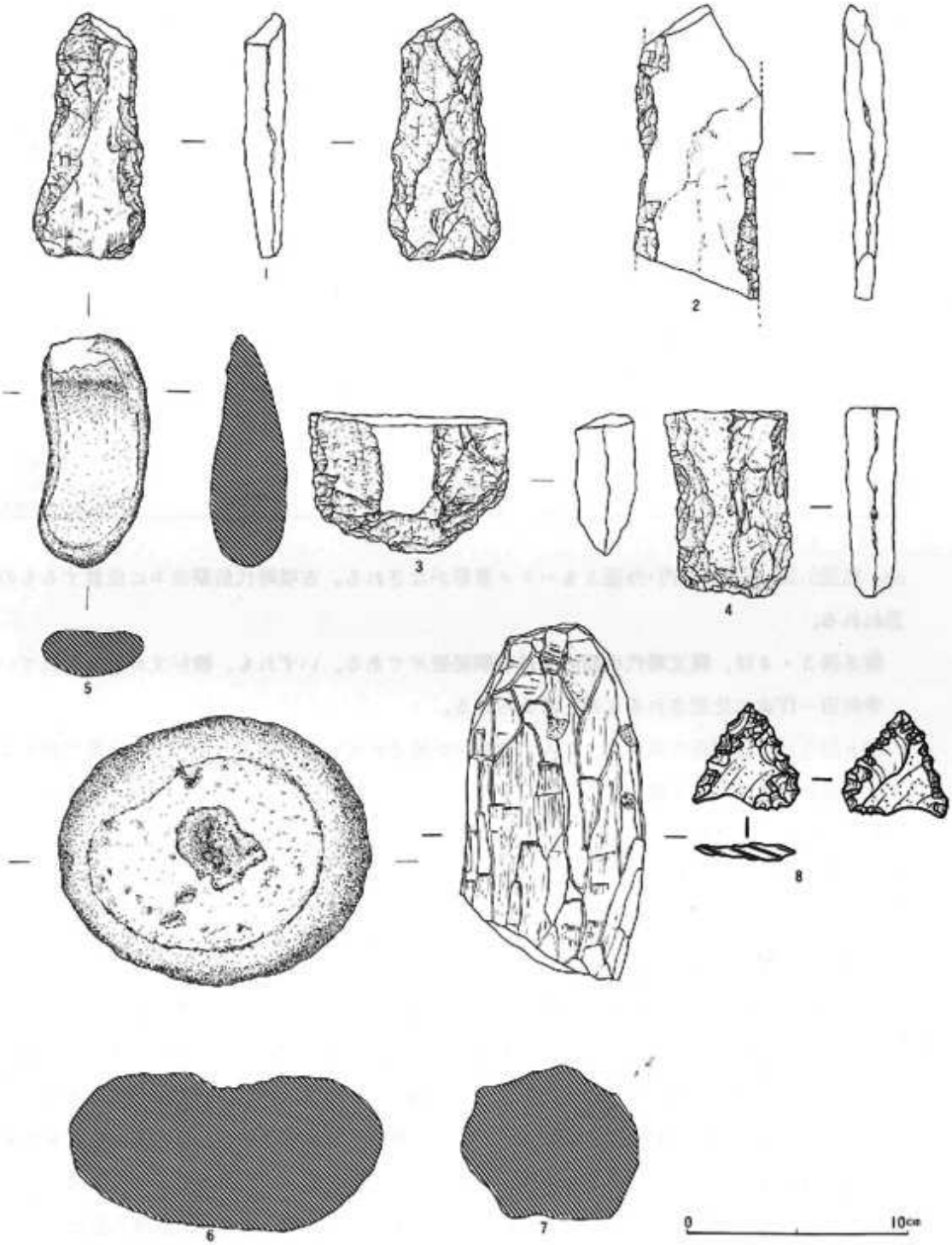
第8図5は、壺胴部の破片で、2本の沈線文が施されている。破片上面は、接合帯で割れており、断面には、粘土帯を接合する前の工程としてつけられた、ヘラによる刻み目が9本見られる。

第8図6・7は、箱清水式土器の甕の破片である。6は、口辺部〜頸部の破片で、口辺部に櫛描波状文、頸部に2連止めの簾状文が施される。7は、胴部破片で、櫛描波状文が施文されている。

打製石斧（第9図1〜4）は、4点出土している。1は、側縁がほぼ直線となり、刃部で丸味を帯びる形態である。刃部裏面に磨耗が認められる。2は、残存部ほぼ中央部に浅い抉入部を有するもので、刃部と基部を欠いている。3は、基部を欠くが、残存部から推して大形の打製石斧である。刃部に僅かに磨耗が認められる。4は、幅に比して長さが短い感を呈しているが、完形品と考えられる。刃部の磨耗は、観察されない。石質は、1が細粒砂岩、2〜4は、荒船玄武岩（玻璃質基性安山岩）である。2〜4は、節理面に沿って剝離した石材を加工したと考えられる。

第9図5・7は、砥石である。5は、河床礫を用いたもので、表面・左側面に擦痕が認められる。

7は、一方の端部を欠いている。原石から整形した際のノミ状の工具による加工痕を明瞭に残している。石質は、5が粗粒砂岩、7が凝灰質砂岩である。




第９図　細田遺跡出土石器実測図（1：3但し石鏃は1：1）

第4表　細田遺跡出土石器一覧表

| 挿図番号 | 出土遺構（グリッド） | 器種 | 最大長（cm） | 最大幅（cm） | 最大厚（cm） | 重量（g） | 石質 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9－1 | M－6 | 打製石斧 | 11.1 | 5.1 | 1.9 | 101.3 | 細粒砂岩 | 完形。 |
| 9－2 | 表採 | 打製石斧 | (13.3) | 5.7 | 1.75 | 135.25 | 荒船玄武岩（破屑質基性安山岩） | 刃部及び基部を欠損。 |
| 9－3 | 表採 | 打製石斧 | (6.4) | 9.0 | 2.75 | 175.9 | 〃 | 基部欠損。 |
| 9－4 | 表採 | 打製石斧 | 8.5 | 5.6 | 2.4 | 138.4 | 〃 | 完形。 |
| 9－5 | M－8 | 砥石 | 10.5 | 4.8 | 3.4 | 206.85 | 粗粒砂岩 | 完形。 |
| 9－6 | R－7 | 凹石 | 14.1 | 12.2 | 7.0 | 699.8 | 浮石 | 完形。 |
| 9－7 | M－8 | 砥石 | 16.2 | 8.1 | 6.9 | 878.7 | 凝灰質砂岩 | 端部欠損。 |
| 9－8 | S－7 | 石錐 | 1.6 | 1.6 | 0.25 | 0.4 | 黒曜石 | 基部の一部欠損。 |

＊石質鑑定は白倉盛男氏による。

第9図6は、凹石で、完形品である。表面に浅い凹みが見られ、また、その周囲に磨面が認められる。石質は、浮石である。この石質の石は、細田遺跡付近では認められず、おそらく、浅間山麓の地域から運ばれたものと考えられる。

第9図8は、黒曜石製の石鏃である。基部の一部が欠損している。　（花岡　弘）

## Ⅳ　周辺遺跡の既出資料

細田遺跡から約1km東南の湯川左岸段丘上に十二山遺跡が存在する。十二山遺跡は、縄文時代から平安時代までの複合遺跡で、花里重美氏所有の佐久市大字鳴瀬字十二山1549―6番地の畑から、耕作時に多量の土師器が出土した。花里氏の話によると、焼石に囲まれて焼土や炭も存在したとのことから、あるいは、カマド周辺の一括資料の可能性が高いと思われる。

遺物は土師器がほとんどで、須恵器は壺と思われる同一個体片3点、大甕と思われる破片1点の計4点のみである。図示できたのは、すべて土師器で甕5点（第10図1・2、第11図3～5）、坏5点（第11図6～10）の計10個体である。なお、土器の観察表は、第5表に示した。

甕5点のうち、1～4は粘土帯を巻き上げて基本成形をおこなったのち体部上半部をロクロあるいは、回転台を利用して器面整形を行ない、体部下半はヘラケズリがなされるという共通の技法が見られる。

1～3は、体部下半のヘラケズリが底部から口縁部へと縦方向になされており、器形は口縁あるいは胴上部に最大径を有し、底径が極端に小さい不安定な平底となる。

4は、全体の器形は不明であるが、体部下半のヘラケズリが横及び斜方向にも見られ、口辺部

がやや直立気味に立ち上がり、胴部のふくらみも明瞭に見られない形を呈している。

5は、上述の1～4までの甕と異なり、全器形は不明であるが口辺部付近ヨコナデ、その下部はヘラケズリの従来の整形がなされており、口辺部が短かく外反するやや小形の甕と思われる。

坏5点は、すべてロクロによる成形で、9の底部を欠いて不明なものを除けば、すべて糸切り底を呈する。また、7～9は内面黒色土器であるが、光沢のある漆黒なものはなく、むしろ灰色に近い粗雑な感じを受ける。

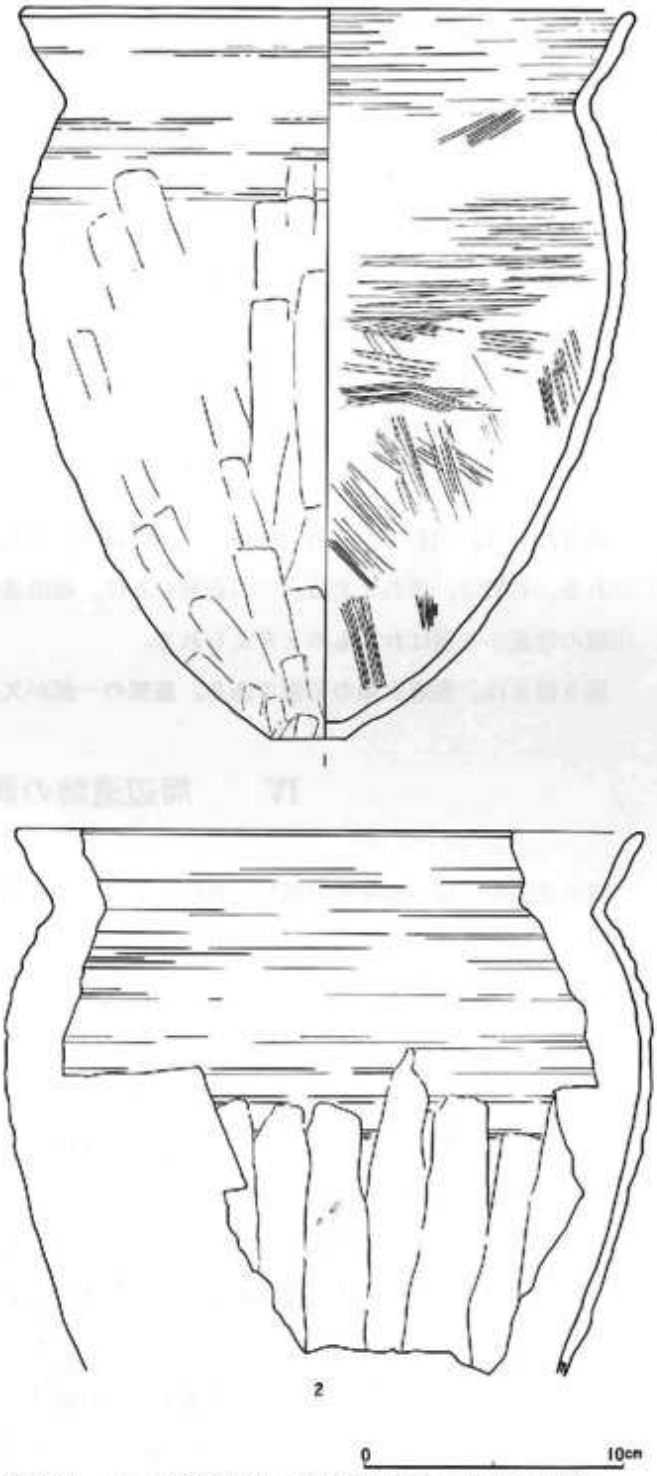
6は、平底で器高が5cmと他の坏に較べやや深く、内面丁寧なヘラミガキが全体に施され、赤褐色の光沢が観察できる。器形は、体部やや内弯気味に外傾して立ち上がっている。

7・8は、上げ底で内面黒色土器である。器高は、両方とも4cmで器形のあり方もほぼ同様に内弯気味に外傾して立ち上がる。

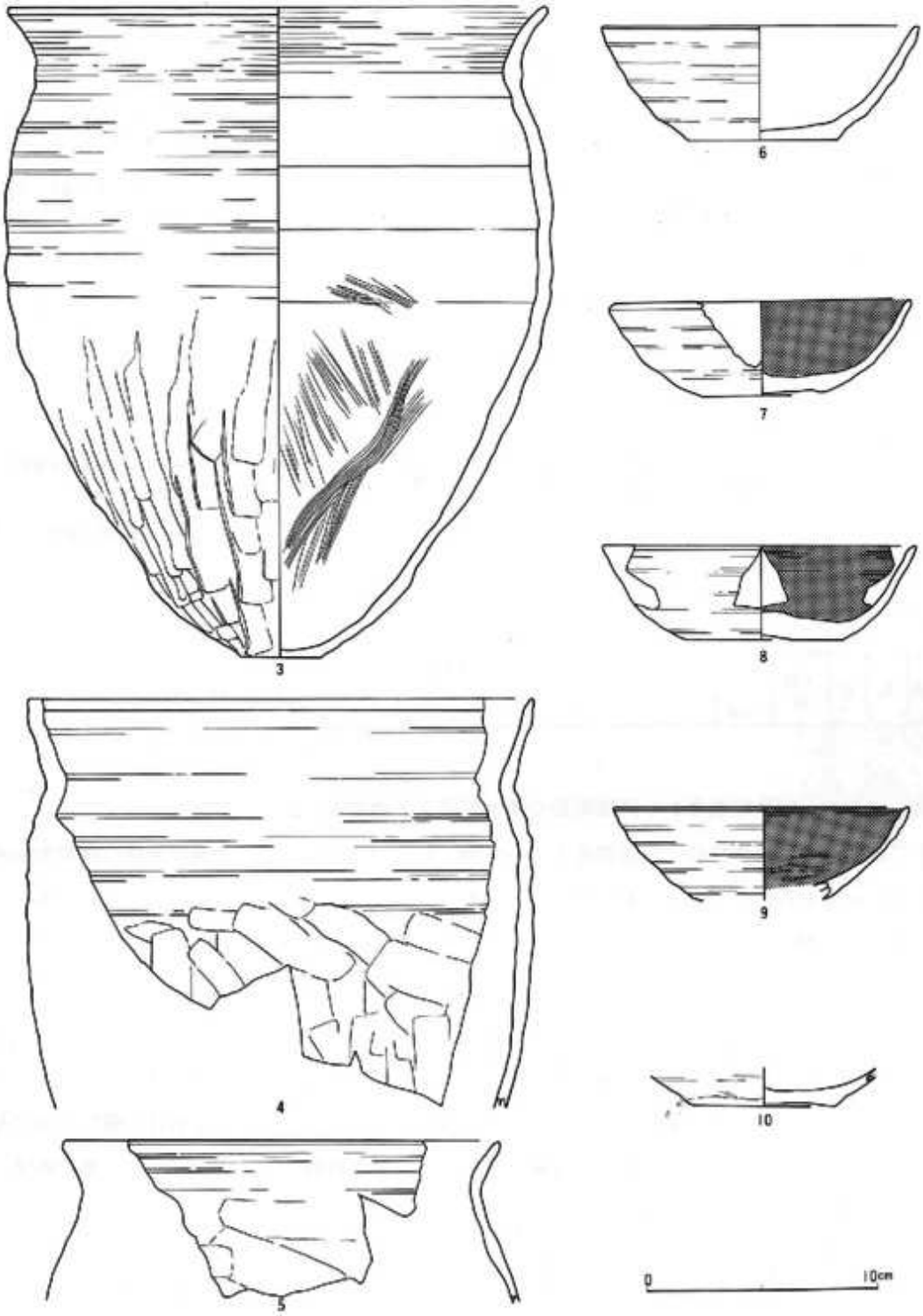
9は、底部を欠いた坏で内面黒色土器である。

10は、坏の底部で上げ底を呈する。

佐久地方では、平安時代の前期頃には、須恵器の供膳形態土器が




第10図　十二山遺跡既出土器実測図〈その1〉(1：3)




第11図　十二山遺跡既出土器実測図〈その２〉（１：３）

第5表　十二山遺跡既出土器一覧表

| 挿図番号 | 器種 | 実測分類 | 破片分類部位 | 法量 | 器形の特徴 | 調整（外面） | 調整（内面） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10-1 | 甕 | R | A13 口～底 | 24.0<br>28.0<br>3.0 | 口縁部に最大形を持ち、口辺部外傾し、やや内弯して立ち上がる。 | 口辺部から頸部にかけてロクロナデ。肩部から下部は下から上へのヘラケズリ。 | 口辺部から頸部にかけてロクロナデ。肩部から下部は細かいハケメ。 | 褐色。内面は頸部付近まで炭化物が付着。 |
| 10-2 | 甕 | F | A22 口 | (24.0)<br>—<br>— | 胴上部に最大径を持ち、口辺部外傾する。 | 口辺部から胴上部にかけてロクロナデ。胴下部は下から上方向のヘラケズリ。 | 口辺部から肩部にかけてロクロナデ。胴上部から粗いハケメ。 | 茶褐色。 |
| 11-3 | 甕 | R | A13 口～底 | 23.5<br>28.2<br>3.5 | 口縁と胴上部に最大径を持ち、口辺部外反する。 | 口辺～胴上部ロクロナデ。胴下部～底部にかけて下から上方向のヘラケズリ。 | 口辺部から肩部にかけてロクロナデ。下部は部分的に細かいハケメ。 | 明茶褐色。内面部分的に炭化物が付着。 |
| 11-4 | 甕 | F | A22 口 | (22.0)<br>—<br>— | 口縁と胴部に最大径を持ち、頸部明瞭に括れず、口辺部直立気味に立ち上がる。 | 口辺部から胴上部にかけてロクロナデ。ロクロナデとの接触付近、横及び斜方向のヘラケズリが見られる。 | 口辺部から肩部にかけてロクロナデ。その下部はヘラナデ。 | 明茶褐色。 |
| 11-5 | 甕 | F | A22 口 | (20.0)<br>—<br>— | 口縁部外傾する。 | 口辺部ヨコナデ。頸部から下部は横方向のヘラケズリ。 | 口辺部ヨコナデ。 | 黒褐色。 |
| 11-6 | 坏 | R | A13 口～底 | 14.7<br>5.0<br>6.5 | 体部やや内弯気味。 | ロクロナデ。糸切り。 | 丁寧なヘラミガキが全体に施されており、赤褐色の光沢が見られる。 | 外面茶褐色。 |
| 11-7 | 坏 | R | A13 口～底 | 13.2<br>4.0<br>5.0 | 体部内弯気味に外傾。上げ底。 | ロクロナデ。糸切り。 | ロクロナデ。内面黒色化が見られるがむらがあり、ミガキはなされていない。 | 外面明茶褐色。 |
| 11-8 | 坏 | R | A13 口～底 | (13.5)<br>4.0<br>7.0 | 体部内弯気味に外傾。上げ底。 | ロクロナデ。糸切り。 | ロクロナデ。内面灰黒色で黒色化と見られるが光沢がまったくない。 | 外面褐色。 |
| 11-9 | 坏 | R | A22 口 | (12.8)<br>—<br>— | 体部内弯気味に外傾。 | ロクロナデ。 | ロクロナデ。内面黒色。 | 外面明茶褐色。口辺一部黒斑。 |
| 11-10 | 坏 | R | A22 底 | —<br>—<br>6.0 | 上げ底。 | ロクロナデ。糸切り。 | 底面の約半分内面黒色。 | 明茶褐色。 |

伴出しており、10世紀前半から灰釉陶器の伴出が目立ち始める。

十二山遺跡の既出資料は、発掘調査によって得られた資料でないため住居址全体の様相を伝えていないと考えられるが、須恵器の供膳形態土器及び灰釉陶器が伴出していないことと、現在、佐久地方の平安時代土師器編年が確立していないため、明確な時期決定はできない。

しかし、佐久地方で報告されている平安時代住居址出土遺物で甕形土器の全器形が判明している遺物は、小諸市曽根城遺跡第1号住居址出土の甕形土器・佐久市周防畑A遺跡H3号住居址出土の小形甕形土器と望月町竹之城原遺跡第4号住居址出土の小形甕形土器の3点のみである。その意味では、本既出遺物の第10図1及び第11図3の全器形が判明している2個体の甕形土器の存在は、今後、佐久地方の平安時代土師器編年に際して貴重な資料と言えよう。　（高村博文）

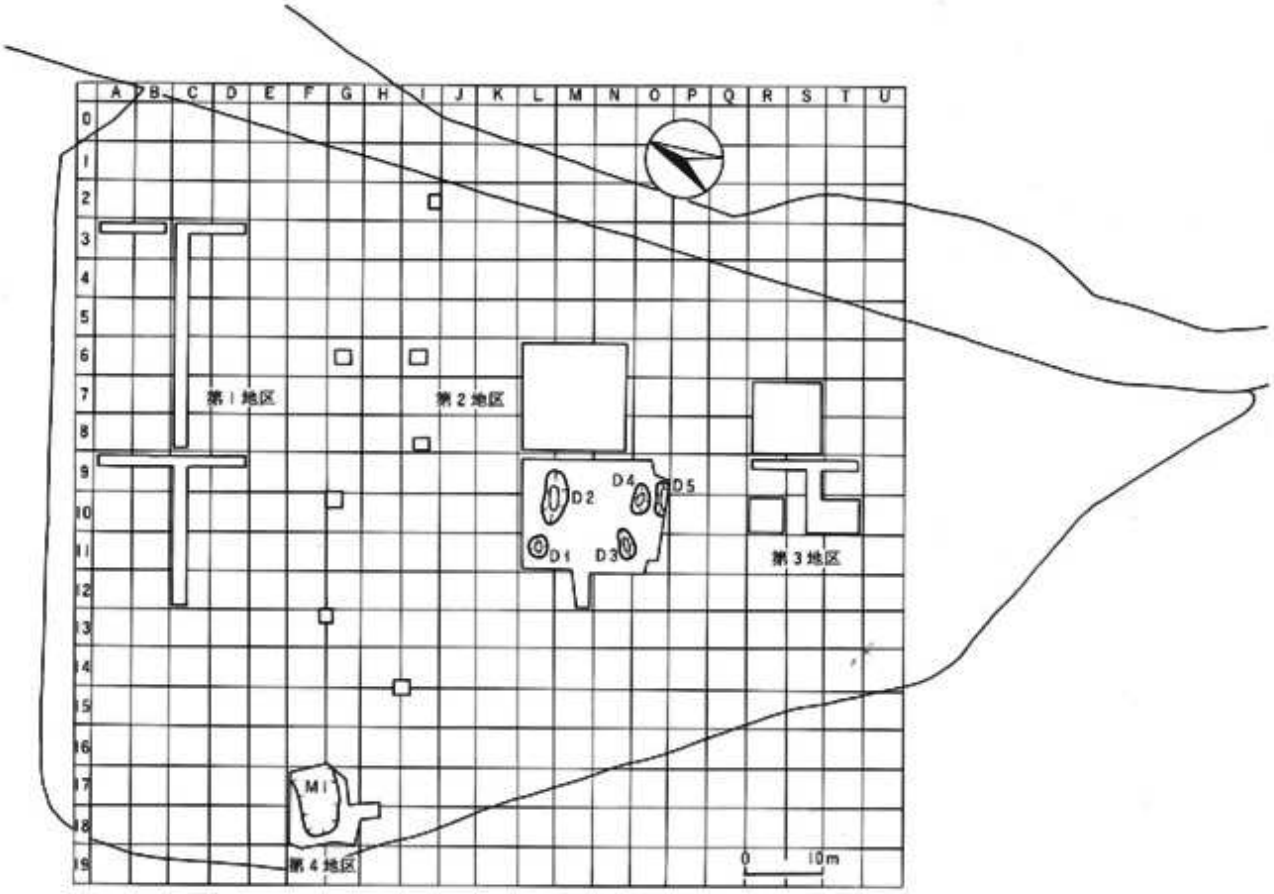
# V　まとめ

細田遺跡において検出されたそれぞれの遺構・遺物については前述した。検出された遺構は、土壙５基、溝状遺構１基がある。一方、出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、凹石、砥石、石鏃がある。

本遺跡で検出されたＭ１号溝状遺構は、前述したように部分的な発掘調査でしかないため、想像の域を脱することはできないが、周溝墓の可能性も考えられ、また、近くの土壙５基も含めて、さらに想像をたくましくすると、発掘調査を実施した地域は、古墳時代前期の墓域とも思われ、近くに集落址の存在があったかもしれない。

最後に、調査参加者の皆さん、御協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げ、まとめとしたい。

（高村博文）




第12図　細田遺跡遺構全体図（１：600）

細田遺跡航空写真

1　細田遺跡遠景（西方より）

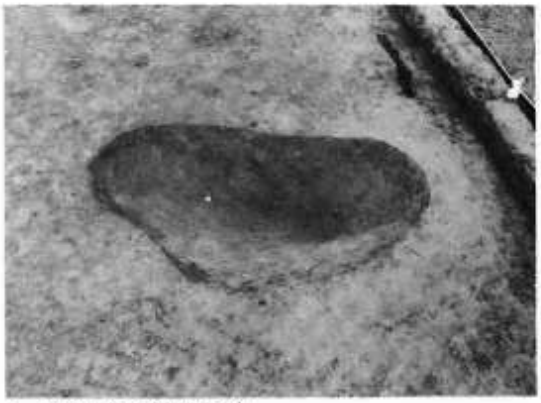
2　細田遺跡全景（東方より）

1　第1地区全景（東方より）

2　第2地区全景（西方より）

3　第3地区全景（西方より）

4　D1号土壙（南方より）



5　D2号土壙（東方より）

6　D3号土壙（南方より）

7　D4・5号土壙（西方より）

8　D4・5号土壙（東方より）

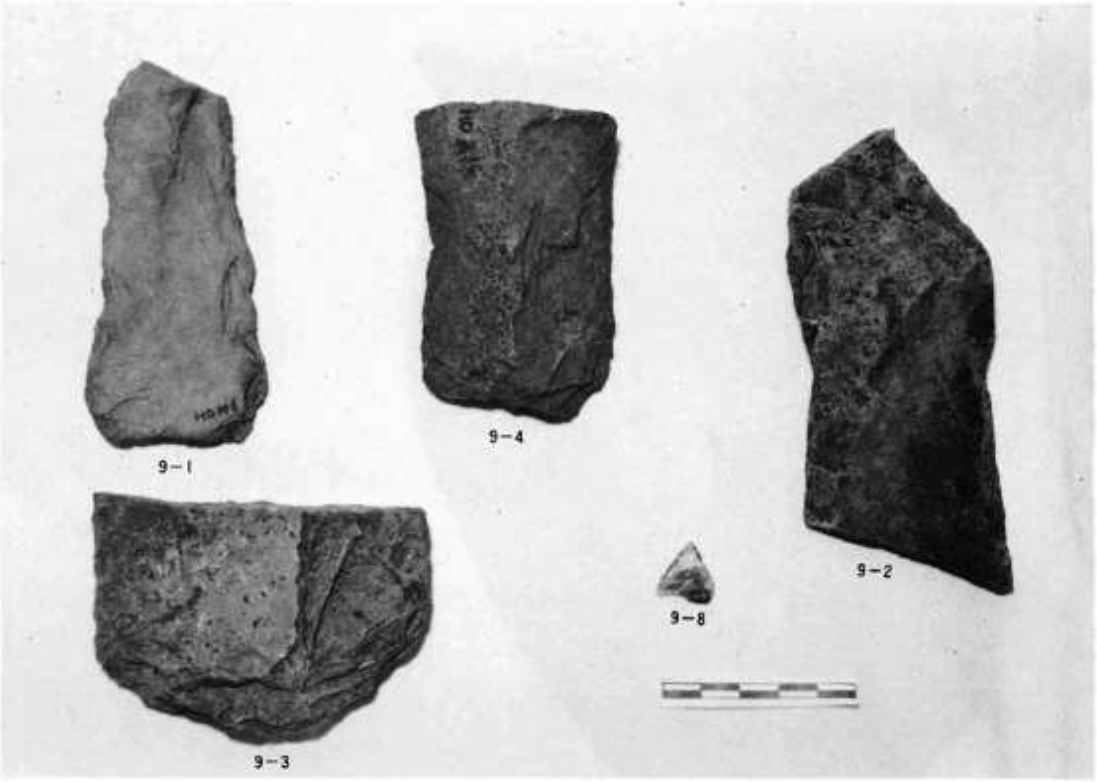
1 M1号溝状遺構（西方より）

2 発掘調査スナップ

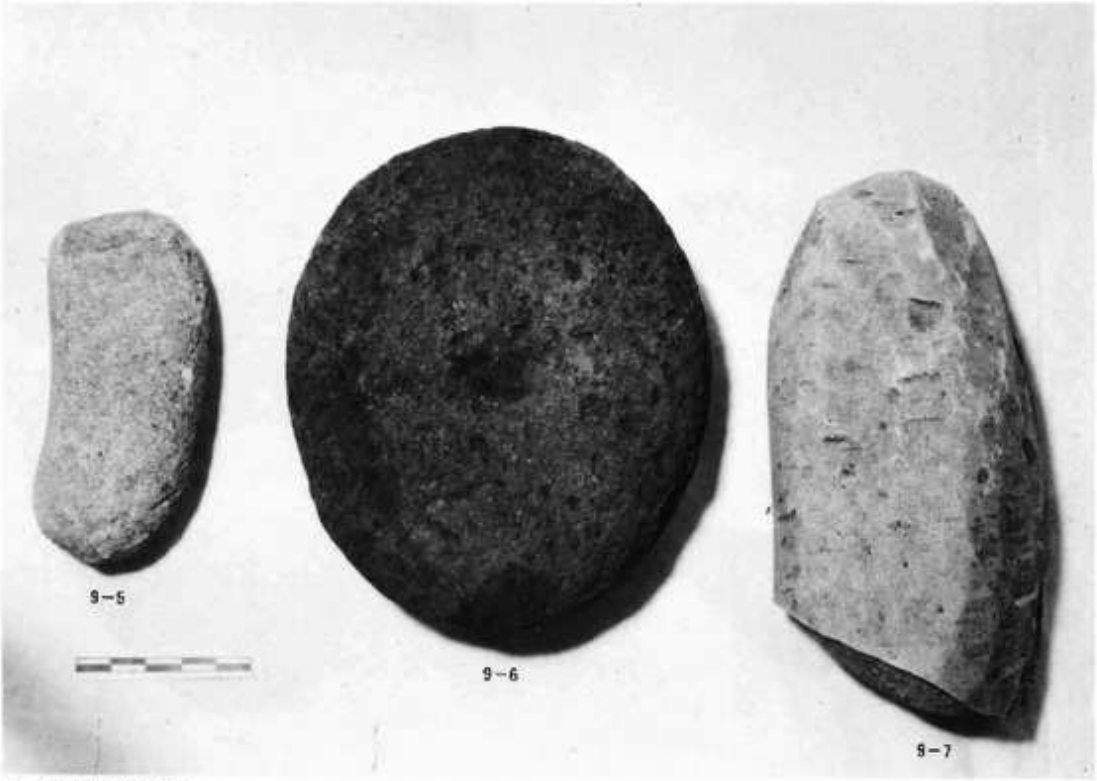
8－1

8－2

3 柳田遺跡出土土器




1 細田遺跡出土石器




2 細田遺跡出土石器

11－3

11－6

11－7

11－8

10－1

1　十二山遺跡既出土器

細田遺跡発掘調査報告書

昭和59年10月31日発行

編集者　細田遺跡発掘調査団

発行者　佐久市教育委員会

〒384-01長野県佐久市中込3,056

ＴＥＬ0267(62)2111

印刷所　株式会社佐久印刷所

佐久市教育委員会